

棹

太



リネ

第百十八號



傾城頭

東京 太 棹 社 發行

日蓮聖人御法海

波森の里子賣の段  
勘作住家のの段  
經木流しのの段  
池上本明寺の段  
道行のの段

義太夫古曲發表會公演

日時  
十月十一日  
午後六時開演

會場 雷門 並木俱樂部

電話淺草一二三五番

出演連名

豐竹巴太夫	豐澤松四郎
豐竹駒登太夫	豐澤七團
竹本卯太夫	豐澤宗之助
竹本朝見太夫	豐澤美之助
豐澤猿喜知	豐澤扇之助
豐澤松四郎	豐澤芳太郎
鶴澤絃內	

事務所

義太夫古曲發表會事務所

深川區清澄町三ノ六

電話本所四〇八一番

幸 松

すき焼

和洋御料理

淺草公園（千束二ノ三四）

牛鍋本店

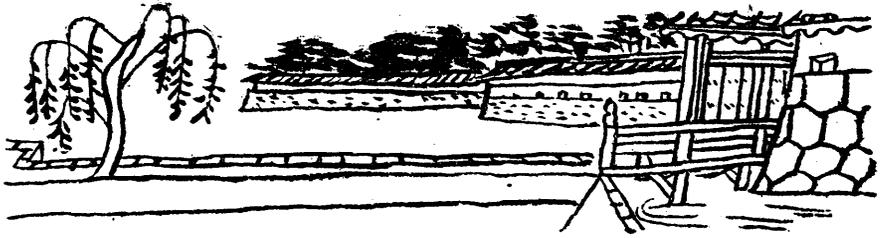
電話根岸(87) 〇三八〇番  
二〇〇〇番

風流・金ぶら・茶漬

【美地句】

去 月 屋

新橋二ノ八  
電銀二〇八



太 棹 第百十八號 目次

江戸作者の親玉は……………	青々園……………	(二)
塵外居放談……………	煙亭記……………	(五)
何時もの文樂通ひ……………	齋藤拳三……………	(六)
山中獨語……………	平山蘆江……………	(六)
ラヂオ淨曲漫評……………	金丸……………	(九)
素藝人描影……………	内田富太郎……………	(三)
太棹社彙報……………		(三)
淨界消息……………		(六)
當座帖……………		(九)
編輯後記……………		(九)
表紙・カント……………	宮尾しげを……………	

# 江戸作者の親玉は

—吉右衛門の先祖—

青々園

今の中村吉右衛門の先祖はえらい淨瑠璃作者であるといふと、如何にも珍説のやうである。しかしそれほどでもないがそのえらい淨瑠璃作者といふのは、お駒才三と「戀娘昔八丈」、伊達騒動の「伽羅先代萩」を畫いた松貫四である。

この松貫四が萬屋吉右衛門といふ市村座の茶屋の主人である事は、「聲曲類纂」にも出て居る。この萬屋は古くから續いた家で、明治時代に至るまで代々の當主は吉右衛門といつて居た。その萬家の娘が、故人中村歌六と夫婦になつて出来た子が今の吉右衛門である。本名は辰次郎であるけれど、俳優としての藝名をつける時に、母方の祖父が萬屋吉右衛門だから、その吉右衛門を貰つて中村吉右衛門となづけた。つまり中村吉右衛門の先代は萬屋吉右衛門で、その先代から何代か昔の萬屋吉右衛門は右に述べた松貫四なのである。肉身のつゞきであるか何うかは分からぬが、とにかく松貫四は吉右衛門の先祖といふ事になるのである。

萬屋が其頃茶屋の舊家でもあり、また芝居町で勢力のあつ

た證據には、今の歌右衛門の曾父はバリ／＼の金座役人で、この萬屋の御客だつたといふし、それが令落してから、歌右衛門を先代芝翫の處へ養子にやつた時に、その媒介をしたのも萬屋であつたといふ。これは明治直前の咄であるけれど、ずつと昔の寶曆時代でもあつたらうか。長壽をした老人たちがこの萬屋へ集まつて尙齒會をやつた事がある。その時に萬屋に百幾歳とかになる飯焚きが居て、それも席上に招かれた。寶曆時代といへば、その時の吉右衛門はやはり松貫四だらうと思はれるが、賤しい奉公人だから禮服をもつて居ないので自分の親の紋付きを貸してやつた。さて、その飯焚きが席上で色々な昔咄をしたが、當時は世の中がゆつたりしたもので芝居茶屋に来る客たちが飯焚にまで祝儀をくれる、たつた一日一晚で四十兩あまりにもなつた事があつて、着物こそ持たないけれど、蒲團を絹で拵へたと語つたさうである。この咄は民間學者で、狂歌もよみ、同じく淨瑠璃も作つた平秩東作といふ人の隨筆に出て居るが、萬屋はそれくらゐ繁昌もし、

また格式の高い茶屋だつたのである。

そこで、萬屋吉右衛門の松貫四は、初めに玉泉堂といふ名前で淨瑠璃を書いたらしい。現に残つて居る淨瑠璃の正本を調べて見ると

明和六年三月、江戸肥前座

蠟夷錦振袖雛形

作者(玉泉堂、吉田二一、吉田冠子)

三人の合作ではあるが、それが初作らしい。もつとも、この「吉田冠子」といふのは人形遣ひの二代目吉田文三郎のこと、先代の文三郎と同じやうに、冠子といふ名前で作も兼ねて居たのであるが、大阪から江戸へ下つたのは此の時が二度目で、その文三郎が來たので萬屋吉右衛門も一緒に淨瑠璃を書くことになつたものらしい。その翌年には例の福内鬼外の「矢口渡」の新淨瑠璃が出來て、これにも玉泉堂と冠子とが合作者となつて居る。

明和七年正月、江戸外記座

神靈矢口渡

作者(福内鬼外、吉田冠子、玉泉堂、吉

田二一)

そうして、二代目文三郎の吉田冠子は、その年の冬、再び歸阪したが、その後にも新作が一篇あるだけで、初作から勘定すると、都合六篇を書いたきりで、玉泉堂といふ名前は見えなくなり、また文三郎が江戸を去つたので作者をよしたものでらしい。それには何ういふ事情があつたか分らぬが、二人の間に拔差しならぬ關係があつたらうといふ事だけは想像さ

れる。

すると、それから四年たつてはじめて、松貫四といふ名で淨瑠璃を書き出した。

安永三年九月、江戸肥前座

鑓鉞そと駄六一代噺

作者(吉田仲二、松貫四)

これは「青柳硯」の書直しであるが、「冠子」と同じ音の「貫四」といふ名に改めたのは、文三郎に私淑したためかと思はれる、また「松」といふ名字は、當時、大阪では近松半二が全盛であつたから、それにあやかつたのか、それとも半二よりも本家の近松門左衛門にあやかたのであらう。この頃は支那風に一字の名字がはやつた時代なので、貫四もそれにかぶれたのかと思はれる。秋葉芳美君が「百科大辭典」に書いた所によると、普通は「近松貫四」と呼ばれて居たとある。

さて、新たに松貫四となつてから年々の作は都合八篇あるが、そのうちでの當り作として、今日も行はれて居るものは、

安永四年正月、江戸外記座

戀娘昔八丈 作者(松貫四、吉田角丸)

天明五年正月、江戸結城座

伽羅先代萩 作者(松貫四、高橋武兵衛、吉田角丸)

右の兩作だけである。それについて詳しいいふ事は略するが、このほかに合作者の顔觸れが揃つたものに、

安永八年七月、江戸薩摩座

納太刀餐鑑 作者(紀上太郎、平原屋東作、松貫四)

がある。この紀上太郎は「白石斬」を書いた三井家の旦那、治郎右衛門高業であり、平原屋東作は前に述べた民間學者の平秩東作である。芝居茶屋の貫四は淨瑠璃作者としてさういふ人たちに交渉をもつて居たのである。

しかし、貫四の作は天明五年の「先代萩」きりパツタリ絶えて、それより十七年後の享和二年には、二代目の松貫四が現れ、その作に

「故人となつた松貫四が筆に残せし城木屋……」云々といふ口上が載せてある。だから此の時は既に歿して居たのだが、同じく淨瑠璃作者の方象亭(二代目福内鬼外)の隨筆によると歌舞伎作者の並木五瓶が初めて江戸へ下つた時、貫四が自分を紹介してくれたといふ事が書いてある。五瓶が江戸への初下りは寛政六年であるから、その時はまだ生きて居たのである。つまり貫四の死んだのは寛政六年から享和二年まで九ヶ年の間でなくてはならぬ。吉右衛門に尋ねたら、詳しいことが分るかも知れぬが、ことし、成田屋の養子披露で帝國ホテルで同席した時、この事をざつと話しただけで、さういふ細かい穿鑿には觸れなかつた。

非常な傑作とはいへぬまでも「昔八丈」と「先代萩」があり、また「矢口渡」がある。江戸の作者としては、福内鬼外や紀上太郎と肩を比べた親玉である。今では古典劇の本家といはれる吉右衛門に、先祖の美名を傳へる志があるならば、貫四を記念する盛んな興行をして、その遺作を演じてはどん

なものだらう、それには「昔八丈」は時節がら困るが、「先代萩」か「矢口渡」、(ことに由良兵庫のくだり)ならば當人にしつくり欲まるだらう。

先日蝶花形さんの座談會へはじめて出席した折、「太十」の「逆賊非道の名を穢す」といふ問題にたうと仲間入りをさせられたので、太十の一隅を借りて私の存じよりを記しておきます。

これは「逆賊非道の名を汚す」といふ一節ばかりを問題にしてゐるから「名を」とか「名に」とかといふ論争が起るので、その前の一節「系圖正しき我が家」といふところから續ければなんの事はないと思ひます。即ち私は「系圖正しき我が家を逆賊非道の名に穢す」といふ正しいテニオハを信じてをります。「太十」の原本を私は知りませんが、これは私の信頼する亡き黒木勘藏氏の校訂に據る興文社發行日本名著全集江戸文藝之部第七卷淨瑠璃名作集下の「繪本太功記」にもさうなつてをりますし、又私が最も尊敬する豊竹古親太夫も昭和六年九月十八日より廿二日迄の帝國劇場では「非道に名を穢す」と語つてゐますが、昭和八年七月十日から十二日迄の東京劇場出開帳の折には三日共「非道の名に」と訂正して語つてをります。この一節は可成り疑問がありました爲、特に注意してをりました一節で、その後の私のノートは目下滿洲にある友人に貸してありますので確たる事は申せませんが、古親太夫のその後の所演も亦黒木氏校訂本の通りだと信じます。尙御参考迄に申し上げますが昭和六年七月十五日から十七日迄の明治座に於けるつばめ太夫は「逆賊非道に名を穢す」と語つてをりました。(都野)

# 塵外居放談

煙亭記

## 人形出遣ひ是非

近頃、都新聞に『文樂の人形使ひが、袴を着けて、扱ふのは甚だ邪魔になる。人形の直ぐ後ろに人間の顔があつて、人形を反り身にする者には、その顔にも力みが現はれ、左りを何かしやうとする時には、人形遣ひの眼も左に向く……』といふ坪内士行氏(實家少女歌劇の人)の文章が出た。

すると、二三日経つて、同じ新聞に、土師清二氏(大衆文藝家)の抗議が現はれた。それは『出遣ひ廢止論は書生論だ、人形遣ひだとて藝人である、年中クロを被つて一生を終るのは甚い、誰れだつて本當の仕事をするのに、匿名では仕ない』といふやうな同情論である。坪内さんの佐渡おけきが編笠を冠つて踊る處は、實に「内ぞゆかしき」で面白いといふのはナト問題が違つてゐるし、土師氏の、匿名で本當の仕事をする人は無い、といふのも、人形遣ひの場合、どうかと思はれる。もとゞ人形淨瑠璃は、黒衣が本來であらうが、文獻によると夙く、大近松がお初徳兵衛の會根崎心中を上演した時、名人辰松八郎兵衛がお初を遣るのに、出遣ひを試みて大喝采を博した、といふ古い傳統?でもあり、我れ等若い頃……イヤ殆ん

ど近年といつてもよい頃まで、特に『此のところ、人形出遣ひにて相勤めます』といふやうな口上を付けて見せたものだ。それが、近頃に至つては、序幕から大切まで、殆んど出遣ひになり、出遣ひ濫用といふ事になつてしまつた。

本誌の前號には、河竹繁俊氏も、黒衣を主張され、せめて、一日三分の二をクロにして欲しいと言はれる、成程人形の邪魔になるといふのは、一應尤ではあるが、實は、あの出遣ひであつて、尙ほその人形が、鮮やかに見えるところに『藝』といふものがある、とも言へる。此の點我等が最も強調したい處である。尤も人形の衣裳と人形遣ひの袴の色合などは、考へて

實はなければならぬが——更らに、これを全部黒衣にすると、文五郎のやうに、それで無くとも、自分の動きの無い時に、スルリと抜けて、舞台裏に引込んでサボルやうな事を容易ならしめる虞れもある、といふ議も出て來るのである。

そこで我等は、端揚は無黒衣で、切り場だけを出遣ひにする。それから成るべく、時代物を出づかひにして、世話物は、多く黒衣にする方針はどうであらうか、も一つ、例を挙げれば「帯屋」のやうなもので、人物の數の多い場合、人形が六個出る、三人使ひだから、三六十八人と、後見が二人位ウロウロする、それがアノ袴姿では、まなきだに狭い舞台セットで、上下に入れ替る時など、實際ゴツタ返して大變な騒ぎである。それがクロなれば、いくらか樂なのであらうとおもふ。

最後に、黒衣遣ひの場合に於てアノ人形は大層巧いが、誰んだらうと、番組を調べて見て、なるほど小兵官だ、お、あれは政徳だつた、とおもふやうな時など、實に文樂ファンの一興味でもあるといふ事も言へる。イヤ毒にも薬にもならぬ愚論を述べて恐縮千萬、坪内さんからは『文樂に淫し過ぎた人、深入りし過ぎた人』と言はれる事だらう。



# 何時もの文樂通ひ

—明治座出開帳總評—

齋藤拳三

此の數年、私は思はぬ違算をしてしまつた、と云ふのは、  
文樂はこゝ數年の壽命であると思ひ込んだので、私の身分と  
しては可成の時間と犠牲をはらつて、見學、勉強をしたつも  
りである、幸にも老人連は案外に健在で、文樂座には、たい  
した變革はなかつた。然るに比較的の身近にある爲に安心し  
てゐた東京の落語講談の席はどうだらう、滔々たる勢で崩壞  
していつたではないか、私は其の寂しさを僅に友人安藤君に  
うつたへた位のものであつた、一方の文樂はどうだ、上京興  
行を要しない程、本城の四ツ橋はいゝ成績だつたと云ふ、東  
京素戔連中の後援團體と云ひ、大阪の思ひもうけぬ若いイン  
テリの支持者の出現と云ひ、松竹は今の一流所の演技をト  
キーに残す企畫さへあると云ふ。

私には「多幸なる文樂上」と云ひたい位だ。其れが八月上京  
の遠因ともなり、津、古靱拔きの上京ともなつたのであらう。  
私は此の度の企畫には眞向から反對する、たまの文樂である  
堂々と一座全員の引越興行をすべきが至當である、いはんや

通し狂言に名を借りて久々の若手に無理な役場を與へるに於  
ておや。

## 第一回 假名手本忠臣藏 (一日見物)

忠臣藏の大序は人形劇が歌舞伎に打負けてる場合の雄なる  
ものゝ一つである、大序に折角、美事な三味線の手が附けて  
ある、今の中に正格に保存したいものである、今度など榮三、  
文五郎の兩頭目が師直、顔世で出てゐるのだ、もう少し丁寧  
演出して欲しい。今度は暮切れ師直が若狭之助に意地の悪い  
事をする件の「早へわ」を富太夫が云ふ、私はこれは反對であ  
る、座頭榮三の一考を煩す、織太夫の殿中は平凡だ、此所を役  
場としてゐた當時の古靱太夫の年輩に比較してももつと勉強  
すべきであらう、腹の強いと云ふ事の一部分には言葉がよく  
解ると云ふ事も含まれてゐると思ふ、織太夫のは解り憎い點  
がある、團六には三段目に限り團平系の手を弾く事を望む、  
弾く所の少い殿中だけに「脇能過て御樂屋」は派手に行きた

5。

殿中の三味線で思ひ出すのは「かうすると抜打ちに」の件の道八の間髪を入れぬ巧さである、人形では光之助の刀の目釘をしめす件が刀を頂いてる様に遠くからは見へる。

伊達大夫の「落合ひ」はもつと裏門らしい風格を語つて欲しい、あれでは旦那藝の上等なのに近い、友衛門の弾く手も私はあれよりも團平流の方が好きだ。「堤燈閃く大騒ぎ」の件など仙糸の模様の弾き方のよかつたのを思ひ出す。

人形では文五郎のお軽が勘平に伴内の來たのを教へるのは何かしずみおられぬ文五郎の藝風の特長でもあり、又大阪式歌舞伎の姿でもある。四段目になつて大隅大夫は相變らず、間が延びて、時々はづれかゝるのは我々最員をヒヤ／＼させる事おびたゞしい。總じて此の人の四段目は泣き過ぎる、然し寫實的に下で云ふ九大夫の、嫌らしい笑ひを始めとして「つらふくらし」の吹いて云ふ巧さ「うらむらくは館にて」の云ひ方、「郷右衛門殿中御取次ぎ」と軽く云つて気分を出す皮肉な云ひ廻し等、所々に妙所も聽かれた、然し其れにも増しての傑作は廣助の糸であつた、やゝともすると、はづれ勝ちな難物、低音な大隅をよく弾きしめて、痛々しい程、子もりをしながらも、沈痛、重厚な四段目の貫録と所謂「通さん場」の閑寂な気分を色濃く太棹にたゞき出した。

廣助はどうしてこれだけの美事な腕を持ちながら不運な道を歩いて來たのであらう、私はなまじ世相の見へる聰明さと

都會人の弱さが、かへつて、彼に廻り道をさせて來たものと思ふ。藝人の一生を通じて眞の最負は數へる程しか出現して來ない事は後になればはつきり認識出來る、聰明なる廣助よ幸ひに過去を憶つて晩年を全うし給へ。

人形では文五郎の顔世の花獻上けんじょうの間のシツトリとした巧さに敬服した、文五郎は世人の喝采する派手な動きの箇所よりこんな靜せいでの形の間に思ひ知れぬ妙味があるのである。

玉藏の判官はよくない「切腹申附るもの也」の件など兩手の上げ方が高過ぎて泣いてる様に見へる、榮三の由良之助は「御臺所は正體なく」の件が巧い。

呂大夫、吉左の身賣りは此の人の長所の出ない語り場であつて狂言の犠牲球であつた。

駒大夫の六段目は「意外な巧さ」の一言につきる、即ち郷右衛門がよくて勘平が悪いなど凡そ意外である、「おかまいなくとも」と軽く云ふ件「先もつて」と細い小音で云ふ言葉の樂々と郷右衛門になつてゐる點、獵人三人をツメの人の形かたちの如く軽く語る點、こゝ等が意外の巧さで「思ひ知つたる」で泣く腹違ひ「金は」と糸と離れ過るケレン、等が意外の悪さの方である、清二郎の糸はまだ未成品である、人形は門造の郷右衛門と政龜の千崎が非凡な傑作だが私は前年「太棹」紙上に是は細説したから省略する。

別に今度は勘平の手負ひに細三味線が入るが此れは全く駄足である。七段目のカケ合は大隅大夫の由良之助が「由良鬼と

こへ」とらまへて酒に」の間を整然と守つてゐるのを當り前の事だが書いて置く、此れは安藤君から聞いた話だが、此れを平右衛門の尻押さへ、由良之助の頭抜きといふといふ、七段目の一つの鐵則、憲法である、人形は榮三の由良之助と小兵吉の九太夫の搦む「己れ末社ども」の件が傑作である。

文樂の人形遣は反省心がないから書いても無駄だが、平右衛門の着附の裏のモミの赤は非常に目ざわりである。

文五郎のお軽はどうした譯か例のサワリで平右衛門の持つて來た勘平の位牌を使つて動く獨特の仕草をやらなかつた、まさか初日なので小道具が忘れた譯でもあるまい。

## 二ノ替り (八月五日見物)

「戀女房染分手綱」の呂太夫、吉左は先日ofラチオの「吃又」程に聞けぬ、私は次の變りを期待したい、人形では双六の場の値か十七八分を紋十郎の重の井が代役を出してゐる無法に啞然とした、まして相手役の玉藏が彌三左衛門で出てゐるのに無禮千萬な事である。

私が文樂の人形に絶望する一因は榮三、文五郎の次の時代の重責を背負つて立つ可き玉藏、紋十郎が技藝は第二としても、其の藝術感が餘りに劣つてゐる事である、成程、一時代後の人形遣と點頭だけの閃きの見られない點にある。

次に困るのは此の度は相生、織の兩太夫を歌舞伎にカケ持させる爲、合邦の前半だけで相生太夫と久々の吉五郎を味は

なければならぬ事である。

鶴澤道八は人形に愛想をつかして、かへつて歌舞伎役者との共演に生き由斐を感じてゐると云ふ、それなれば、いさぎよくチヨボに轉向して米太夫、鏡太夫を引率して堂々と演じる方が男らしいと思ふ。太夫無人の文樂から新進の若手をチヨボ身習ひに引抜いて本城の文樂を無人にする必要は、更に見あたらぬではないか、初見參の吉五郎は合邦前半だけを閉いても流石に弱腕ながらも、太夫に好かれさうな具合のいゝ三味線である、音色もなか／＼いゝ、大隅太夫の後半は相變らず無器用を通り越した無器用である、「玉手はすつく」の延びるのや「はしたなき」や「にくいはずじや」がそれだ、然して此の大疵をも承知の上で此の太夫の未來を待望する所以のものは渺茫とした荒けづりな古淨瑠璃の懐しさがくみ取れる點である、玉手や淺香姫の言葉の調子を變へずに云ふのも偉い、合邦の「心の義理が立つまいがな」や「親じやないわい」や「愚鈍なからじや」は、「此れが坊主のあらう事かい」と共に故三代目大隅から糸を引いた妙味が隨所に聽かれるではないか。廣助の糸は相變らず見事である。

「平等利益」で一寸ひつかゝる白玉の微疵はあつても、「苦しみ給ふと思ふ程」から「いや増す戀」となる件の如き誰にもない妙味を弾いて居る、「左に歪」の件も同様、人形は榮三の合邦が群を抜いてゐる、他の人だとチャリになつて困る合邦を流石にシツトリ使つた。

次の紅葉狩は入場税を取られた上に又税金の様なものである、私はこれを入場税附加税と呼んでゐる、菊五郎の更科姫を見てあの紅葉狩を見て居られる人は全く天下泰平の幸福人である。

駒太夫の新口村は相當面白かつた、「手を合す」や「知られけり」の極度に糸をはなれたケレンがケレンに聴へずに我々を納得させるのも今度上京の太夫中、足取りの巧さが群を抜いてゐるからであらう、然し「名乗つて出い」を盲人聲でどなりつけるのは、いたづらに、土佐、古靱、の此の箇所を思はせて寂しい。

前年私は清六の新口村の糸を褒めて友人からツナギが弾けてないと注意された事があつた、然し今度の清二郎を聴くと新口村に限り清六の糸は師の道八よりもぐつとよかつたと思ひ出す、人形は相變らず榮三、文五郎、健在なのに政龜の忠兵衛の衰へが目立つ。

三十三間堂棟由來では織太夫の語り方はもつと陰氣でありたい、織太夫は全段を通じて大隅の様なボロは出さない、然し此所と云つて飛び抜けて感心する所もない、私が文樂現役中、古靱、津の次に大隅を取るのには此の人がどんな悪い淨瑠璃を語つても必ず一二ヶ所いゝ箇所が何處にか散見するからに外ならない。

人形は縁側に腰をかけて扇でも使ひさうな紋十郎のお柳「かこちあげく」で両手を目にあて、泣く玉藏の平太郎共に

よくない、なげくと云ふのは涙を流すと云ふ意味ではないと思ふ、一事が万事である、藝の心がまへが出来てゐないでよき藝の生れるはづがない。

### 三ノ替り (八月十一日見物)

私は始め菅原が立つと聴いた時、これは道明寺が半分づつで織、相生の一日變り賀の祝が駒、寺子屋が大隅だと思つたそれで楽しみにしてゐたのである、所が發表された役場を見て、失望してしまつた、彌次喜多の一日變りとは嘩然としたこれは將に第二回目の入場税附加税である。

車引は、人形劇の歌舞伎に劣る點忠臣藏の大序と好一對である、悪い方の代表が播路太夫の時平、人形も紋十郎の櫻丸など時平の言葉の間首を下げて聞いているなどは、聰明なこの人には不似合な失敗である、此の一段の櫻丸は終始、無念残念の氣持であるべきだ、茶釜酒の伊達太夫は端場を語る程よくない、今病氣で休んでゐる鏡太夫が、六角堂や加賀見山の廊下のやうな端場が不思議に巧かつた、さうして切り場を語るとどうも獨自の解釋が多過ぎて面白くなかつた、是れは義太夫節の修業の如何に困難であるかを語る好適例であらう。即ち伊達太夫は端場の修業がつんでゐない、一方の鏡太夫は反對に端場の修業をつんでゐる。然して切場を語る様になつてからの鏡太夫は端場時代程の必死の練磨、研鑽が出来てない爲ではあるまいか、富太夫の喧嘩の段を経て、大隅太夫、廣

助の櫻丸切腹になつて始めて文樂らしくなつてくる。

大隅は例によつて「大宮所の」や「櫻丸が命ながらへ」と延びる箇所もあるが、白太夫の「様子を聞けば右の次第」などなか／＼いゝ、白太夫と八重と互にはげましながら交互に泣き悲しむ「そなたも泣きやんな」「あい」のクライマックスなどいゝ音遣ひを聴かせた。

人形は門造の白太夫が三寶を持つての後に後鉢巻をしての出から「頼みの力も」の扇を両手に持つてパラリと落す人形劇獨得の愁嘆場の演出に老熟枯淡な味を見た、只此の人に限らず人形の白太夫の悪い事は「唾を呑込んで奥へ行く」の重要な性根場で淨瑠璃の文句にかまはず引込んでしまふ事である、幸に勉強家の此の人あたりは何とか改めてもらひたいと思ふ。

紋十郎の櫻丸は此の人のものでは類のない佳作で神妙、親切な演技である。

次に天拜山が出たのは東京では始めてである、憤つた智相亟が白梅の小枝で平馬を打ちすへると梅花がバツト散るや平馬の首が空中に飛び走つたり、白梅の花を口に入れると火を吹いたり、雷神になつた相亟が宙吊りで上空の雲へ消へると下手船底へこれを使つた玉藏が早變りで現はれたり、我々の祖先が喜び迎へた古き人形の奇怪美が再現されて面白い、呂太夫、吉左の音楽伴奏も此の古きスペクタクルの説明にふさはしき演技であつた、玉藏の相亟も久々で前半こそ品位を缺

くが後半荒々しい使ひ振りが美事だつた。

駒太夫の寺子屋は座頭の藝でない人が座頭で來た爲の怪奇な出し物で駒太夫最負にとつては後年懐しき語り草ともなる語り物であらう、菅原四段目の如き盲人の此の人には手近の様でゐて最も遠くにある世界ではなからうか、松王も源藏も下品で面白くなかつた、「性根どころか」でポツキリ切れるのなぞ、柄にない語り物だと盲人聲が耳立つて困る、めづらしい演出としては「呼出し」が現今は團平流の「學校」が多いのに古風にやつた事、即「走り行く」など眞すぐに云ふ事「助けて歸る」でセキを入れた事長所をさがせば呼出しの「ぼんよ／＼」の件のいゝ事、千代の「そんなら連れて」や戸浪の「他人の私さへ」の件でいゝ持味を出した事であつた、段切れのいろは送りは津、古靱の兩頭目が苦手の箇所だけに哀れ深い情趣が聴かれた。

若手の有望な三味線、清二郎に對して感じた事は此人が此れ以上の上達は駒太夫を弾いては望めない様に感じられた。人形は何時もの通りの大幹部總出で書く要もない、只私は政龜の戸浪の無器用だが古風な女形に心を引かれた、現在文樂の女形と云へば文五郎が非凡な所から文五郎一色にぬりつぶされてしまつた感が深い。

僅かにその内に政龜と小兵吉から古風な別の女形遣ひの味をくみ取る事が出来るのである、近來、老齡の此の人達にはめつたに若女形の役が廻つて來ない。

心ある若い人は此の二人の演技に關心を持つて欲しい。

#### 四ノ替り (八月十六日見物)

藝題が生寫朝顔日記と決つたら、舟別れ、濱松と出すよりも笑樂を出して宿屋の全段を通した方がいと思ふ。

其れも相生太夫程度ならば、成程、年一度の文樂と有難がる品物でない、此の人は一座中一番連中最負が多いと聞く、一人位は若手一座と銘を打つてある興行の責任の太夫としての苦言を提する人はないものかしら。人形も榮三、文五郎が出てゐないと平凡である、門造の徳右衛門の朝顔の「年月尋ぬる夫」の言葉聞いて頭に手をやるのと羽織をかぶつて引込む道具變りの特異な演出を見る位である。

大井川を語る文太夫を聞くと一寸、小感がある。藝道やうやく衰へて義太夫の太夫は相當聲量のある美音の人ばかりになつてしまつた、世の中が變つて若い人の苦難の勉強は出来難いと定まつたら、一つ頭のいゝ、難聲惡聲の人を勉強家と云ふ事を第一の條件として採用して見る逆手は、どうであらうか。次の太十を「湯殿に入るや」までを呂太夫とは變な所で切つたものだ「海山かへがたし」や「二世も三世も」など例のイキンだ震へ聲の短所が出て面白くない、吉左の方は音こそ悪いが「割小ざね」など結構だ。

「月洩る片庇」からの大隅太夫は樂器からはみ出してしまふ短所は相變らずだが「表口」や「髪逆ち」など大きく、現今

の太夫が理智的な繊細な藝風の多い中にあつて僅かに力量だけで押していかうとする藝風は相當買はなければなるまい。「泣顔かくし」を無技巧に眞すぐ云ふのなど一例である、「ひつそぎ槍」なども古風にのんきな語り方がよかつた、「意恨重ぬる」の「ぬ」は蝶花形が又ぐぐぐ云はない内になほした方がいゝ。人形は榮三の光秀が渾然たる演技である、「突込む手練の」でキツとなる件、「もう眼が見へぬ」で横目にじろり手負をにらむ意氣、特に大落しで十次郎、初菊を左右にいただいた兩手を突き離して陣扇で下手向きに顔をかくして泣き上げる件は白眉である、文五郎の操は「妹背の別れ」の件が際立つて目に付く。

然し其他は平凡で特に人形の十次郎は誰がやつても靜の形で有るべき「水上げかねし」でノコノコ歩いたり其の着附もゴチャ／＼したもので、赤に、桔梗の紋の附いた紫の袴の歌舞伎の着附に遠く及ばない此の場の十次郎はどうしてもイタ附であるべきである。

駒太夫の炬燵は情痴の世界専門の太夫だけに結構で「まんならむごうは」と盲人聲でどなり付けるあたりをのぞけば結構である、「よもや貸さぬと」のあたり誠にいゝ快感を興へる「なんともないかいな」の言尾に女太夫の味もあつて一部の御最負は喝采を惜しまぬであらう、人形は必ず黒衣ですべき世話物を出使ひにする悪習がたゞつて「おさんが尼になつた」の邊で榮三の治兵衛と紋十郎の小春の入れ變る件がゴチャゴ

チャで何が何だか見物には解らない。

盃の件に榮三の治兵衛が上手向きなのに紋十郎の小春も上手向きなのは畫面にならないと思ふ、これは小春が下手を向くのが普通である、玉藏の五左衛門は「引きさき〜」の仕草が例によつて早過ぎる、誰か大向ふから「まだ〜」とカケ聲をしてやるといふ、傑作は小兵吉のおさんで古風に哀れ深く遣つてゐる「もつたいないわいな」の件など可愛らしい、久々に此の人の練り上げた技巧の光りに接した感がある。

伊達太夫の中將姫はやはり此の人の未來を待つより仕方がない、友次郎の絃で語つた宿屋や土佐太夫色のある「長局」文樂入座前の「にほひ」のする先代萩、即ち三曲三様の感じを聴衆に與へるのはまだ此の人の藝が上手な素人藝なのであるまた太夫、伊達の風格がない、然し私は此の將來を樂しむ一人である、其の理由は發音の明瞭な事である、今度の一座でも文句の一番ハツキリ解るのは大隅と伊達である、土佐太夫引退後の晩年の創作は一つに伊達の大成ではあるまいか。

文五郎の中將姫は始めて見たが責められる間や豊成との別離で「うちかけ」から顔を出すあたり流石と思ふ。

其他先代紋十郎の高弟で不遇な紋太郎の桐の谷が相當見られるのと、政龜の岩根御前が不思議な程悪いのを記して置く。

## 五ノ替り (八月十八日見物)

千本櫻の通しの役場を見て私は文樂座の企畫の頭の悪さに驚いた。

續説する迄もない人形芝居の如き古曲に對しては脚本の善さはむしろ第二で一つに演出者である、演出の善悪は逆に善き古曲の生命までも當然左右してくる。

萬一、出雲作る處の義經千本櫻は古今の傑作故に如何なる演者如何なる時間にも先づ上演すべしとの意見の人があればそれは決して、よき文樂の知己ではあり得ない。

我々が千本櫻のタテを待望久しかつたのは津、土佐、古靱、三頭目を中心としてであつた、以上の三人は斯道の本格的な修業をして來た人だけに一應は此の大物を語りこなす事が出来る、又實際に務めても來てゐる、尙端場の重大な千本櫻だけに端場ならば相當美事に仕生かす、綴、駒、大隅に適當な語り場があるからで有る。

此の度の如く、人形は榮三、文五郎以下全員引越し太夫は駒、大隅以下の若手半數とすれば、太夫に適材適所の當を得てこそ始めて人形との均衡も取れると云ふものだ、然るに久々の駒太夫にすし屋の後半とは何事であらう。

其の上、上演時間の無理と不足は二段目の渡海屋銀平が相模五郎を痛めつける件を抜き、四段目、川連館の忠信の入り込みを刈り込んだ爲、只さへ複雑な此の古曲をすじの通らぬ

ものとした、又若手の大夫に役場を興へる爲小金吾討死をカケ合とした事も、古今の悪例であつた。

小金吾討死——端場の掛合、將に義太夫界も新體制であるで此の度の千本櫻は、呂太夫の斯道でいふ幽霊物語りから始まる、知盛の唄ひがかりで打ち込むつづみが馬鹿に早や過ぎて、こんな鳴り物は全く無茶である。大隅の渡海屋は「八大龍王」あたりに莊重な氣魄を缺く恨みはあつても足取りや調子は無難であつた、人形の方は非常に面白い演出がある箇條書にすると、

一、敗戦の合圖を見た典の局は死を決して波打際に白布を敷き樽扇をかざして帝の御後に従ふ

二、知盛が手負になつて歸つてくる、其處へポンポン矢を投げるのは幼稚で面白い

三、道具が變ると一面の海原で上手の岩石の上に義經が帝を抱き牽り辨慶を従へて現れる、其處へ知盛は一人で船をこいで來る

四、此の場で知盛は碇を背負つて入水する、昔は此處へ平家蟹が上手から現れる、其の中から知盛は此の度の如く亡靈で岩石の上へ現れる、私は常に昔の様に蟹を出す方が面白いと思ふ、知盛が蟹になるほど幼稚で愉快だ

私は前年榮三の知盛を見て居るが、此れは一度文五郎の知盛、榮三の典の局で見たいと思つてゐる、文五郎は養助時代に得意の役でよく知盛を遣つてゐる。

次の相生太夫の椎の木は無事だ、發音明瞭でいゝ、吉五郎の絃も新左衛門を思はせる弾き方である。人形は榮三の權太が合羽を敷いて其の上に坐る特異の演出がある。

小金吾討死で、玉幸の小金吾は「胸なで下し」の件で自分の手で胸をなで下すのは馬鹿／＼しい、これは安堵したと云ふ形容であらう、又落入りに松の枝を切るのも意味が解らない、呂太夫のすし屋の前半は此の度上京中の此の人の佳作である。特に權太を巧く語つてゐる、吉左の絃はこんな大物だともまだ貫録がたりぬ「眼をしばたゝき」の件など友次郎の甘かつたのを思ひ出す。

駒太夫の奥は小音非力の人が調子を痛めてゐても仕方がない、自己批判のない所を見ると、此の人は一座の座頭は必ず一番いゝ役場を語る責任があると確信してゐるのでは無からうか、明治と四ツ橋の文樂座の大きさの相違など、盲人とすれば算定も出來ぬであらうし氣の毒である。

人形の權太は「かます袖をば顔にあて」で出齒庖丁を使ふのと「どうで死なずば」で手拭で首をくくるまねをするのと梶原からもらつた陣羽織を着てしまふのが異色である、榮三の權太は戸口へ來た處が實に巧い、次の道行初音旅路ではどうしても、道行ものらしい音色を出す三絃をぜひ必要とする、其の意味で道八とか新左衛門とか仙糸とか云ふ人は、よく弾く太夫がなくとも今日文樂には必要なのである。織、相生を歌舞伎座へかけ持させるよりも、道八の方を歌舞伎座から

掛持さす可きであり、又それでこそ、道八も晩年を全うする事が出来ると思ふ、道八の絃が萬一歌舞伎のチヨボ床で、倒れたとしたら、我々最負にとつてはこんな悲しい事はない。四ノ切川連館は至難の語り物である、草木の化身のものが本體を暴露されて及び難い人間界に對する愛着と別離の哀愁感を渺茫と語り生かさなければ、作意が我々には汲み取れない三十三間堂などと同様の語り物で三絃亦チンとかテンとかの一段にも其の伴奏としての用意と貫録を必要とする。織太夫の俊才を以てしても年齢イコール藝と云つた、義太夫節では人間味が露骨に流露し過ぎて、古靱太夫との間にまだ非常な距離の横たはつて居る事を感じさせた。

人形は今度上京中での楽しい一幕であつた、此れは又反對に人間の扮する狐忠信では名人菊五郎の名技を以てしても無理が多く榮三の使ふ忠信に及ばない、文五郎の靜亦同様である。

只一つ榮三が出打ちの床のつゞみの箱から出る件が、昔新富座で私が見た時程に引き立たないのは前幕が全部黒衣でなく遣ひの爲ではあるまいか。

何としても都新聞の鵜の目鷹の目欄へ、土師清二の様な低俗な愚論の現はれる世の中である。人形芝居も少し若手の中堅所が自覺して勉強しなければこゝ数年の壽命であらう。

## 六ノ替り (八月廿一日見物)

毎回出し物の苦情ばかりいつてる様で誠に心苦しいが、始めは大隅の獅子ヶ城で國性爺合戦が樓門から出るとの由であつた、それが引込んで壺坂はいゝが三人片輪とは馬鹿々々しい。

此の度はこれと團子賣りと云ふ二つの入場税附加税があつて以上の六回中、一番まづい企畫である、此の種のものは何としても人形は遠く人間の踊りに及ばないからである。眼をつぶつて義太夫だけを聞く一部の観客層が眞の文樂の知己でない以上に私の知つてゐる或る畫家の様に淨瑠璃の文句も知らずに人形の動くのさへ見ておれば喜んでる階級は一層困る。兎も角も毎年出る團子賣りだけは嚴封したいものだ。

此の興行では常に老役や敵役などを遣つてゐる門造の榮御前や玉徳の傾城鳴戸瀬が案外見られるのを見ると人形の女形は案外やさしくて光秀、熊谷の様な陣立物、荒物がかへつて一番至難なのを一般の観客に知つて頂きたいと思ふ。

先代萩の人形では幕開きの御簾の上げ方がお過ぎて困る、これは弾出しの終りに上げないと折角呂太夫の語る「科は晴れても晴らぬ」の竹の間で一騒動あつた後の政岡の相當重大な心持ちが見物には解らない。

文五郎の政岡は雀の飛んだのを見送る件が一番いゝ、「おもやせて」の所までくるともう盆をふるはせ過ぎて面白くない

話が少し脱線するが文樂の女形を見ると何時も懐しく思ひ出すのは歌舞伎の雀右衛門の舞臺姿である。文樂人形の女形のいゝ形はほとんど全部やつて居たと云つても必しも過言でない、此の人が存命なら一タ、文樂の人形に對しての感想が聞いてみたい氣がする。

冥途の飛脚の羽織落しは淨瑠璃、人形共に斯道で重んじられてる程の感銘に私はまだぶつつかつた事がない、龜屋内の道具變りの引込みに、一番人形の寸法や間の正格な榮三の忠兵衛の引込みが早過た、榮三としては不名譽千萬な事である、一座の座頭として他の連中のを注意をしてやらないのさへ責任の缺けるのに自分が悪い方の眞似をするにもあたるまい、頭取の玉次郎は小割をする位だけでは困る、ちと一日表へ廻つて見物席から人形を見るといゝと思ふ。

駒太夫の封印切りは此の人の晩年を飾る可き今度の東上興行にあたら仕打の無理解から非力、小音の蒲柳の身體を、しかもあの大劇場で柄にない語り物に痛ましくも使驅した爲すつかり調子を痛めてしまひ「舌を切つても死にたい」の邊に僅に駒太夫らしい味を聴かせたのみで中途から一本調子を下げたので上の聲も下の聲も苦しうでよかるべき語り物を臺なしにしてしまつた。

人形は文五郎の梅川がシットリとしてよかつた、「こらしよ」とカケ聲でもしさうな使ひ方さへしなければ何時も結構である。

大隅太夫の壺坂は六ツの中これが第一位の佳作である、兎角理につんでしまふ澤市夫婦を樂々と聞かせたのがいゝ、先代張りのサハリもよかつた。

「云ふてくれたら此の様に」で泣く件「ばちこそあたれ」で一才笑ふ處、「澤市さんおまへ」で一才どもる件などいゝ「鐘を聞き」の終りのシャンにかぶせて「そつと」と出る呼吸はよかつた。土佐太夫はかういふ呼吸のよさで壺坂一段をカバーしてゐる。

人形は紋十郎のお里が意外にシットリとしてゐて巧い「夫婦ぢやないかいな」で前年に入れた足拍子も今度は改めてゐる。この人などはインテリ階級に最負が多いと聞く、紋十郎などは懶巧者ださうだからよき後援者から人形に對する健全な意見を聞く可きである、さうして俗才を藝術三昧に振り向く可きであると思ふ。

まだ春秋に富む人であるだけに先代紋十郎が玉助の人形を見て立役から女形遣ひに轉向したと逆に、女形ばかりに終始せず立役も遣つて見たらどうであらう。



# 山中獨語

平山蘆江

好きな土佐さんが引いたので、文樂が来ても一向出かける氣にもならない。文五郎さんの人形も好いには好いが、見る毎に藝が細かくなつて憎らしく、近頃婦人の身のこなしが荒

つぽくなるにつけて、あれでは生きてる人間の女が人形の女に耻をかかされてゐるやうで、へんな氣持になる。殊に山住居をして四年にもなつて見ると、兎角、人の中に出るのが憶劫ちよきょうで、世界中が忙がしがつてゐる中へ、私のやうな役に立たずがのそく出るといへば、足手まとひになつても申しわけがなく、つい東京の土を踏む事もなしに、朝夕を梅林吹く風と、小鳥の聲にのみ親しみがちになつて了ふ。

ことしの春だつたが、畑からとつて来た茶つ葉を井戸端であらつてゐるところへ、珍らしく金川文樂君が婦人一人つれて、漂然とやつて来た。と見ると可なり重さうな風呂敷包をかかへてゐる。

山はまだ肌寒い時分だつた、炬燵に招しながら、一體何を持つて来たのだといへば、

「まづこの婦人を紹介します。××といふ娘義太夫さんで私は即ち箱屋でございます」

風呂敷の包みの中から出したのは太棹の三味線だつた。金川君は更にいひ添えた。

「先生に久しぶりで聲を出させやうと思つて、此人に来ていただいたんです」

私は嬉しかつた。義太夫の稽古をはじめて丸七年、こればかりは一生止めないつもりですと人にもいひ、自分も思つてゐたのを、ある事情で、我れからぶつくり思ひ切つたのは既に十一年前、あのままずつとやつてゐたらなアと、時折思はぬでもない、何かにつけて、つい口吟むのは所謂一口上るりてぶつくりやめても一旦おぼえたことは忘れられずにあるところなので、とはいへ、今更らしくやつて見るのも面はゆい。黙つてゐる私の目の前に、ボンとおかれたのは寺子屋の床本一冊だつた。

「あんまり久しぶりで聲が出にくいのでせう私が呼び水をし

ます」

金川君はさう云つて自分の膝に壺坂の本をおき、早速さわりの一くさりをやりはじめた。

止めて十一年、その間に一度か二度ぐらゐ高座にすわつた事はあるが、兎に角、全く遠ざかつてゐたといつてもいい、本をめぐつて見るさへ、昔の戀人にあふほどの氣持で、何から話したらよいものかといふ風であつた。何しろ、梅林と竹藪に圍まれた天覽山での一軒家で、私一人住んでゐるのだから、さし當り私が語れば金川君が聴き、金川君のは私一人が聴くといふ風で、幾百人の聴き手の前に坐るよりも曠れがましく語りごたへのある氣持だつた。

ずつと以前、故人の杉山茂丸先生から電話でよび出された事がある。

「君は上るりの稽古をしてゐるさうだね」

「おはづかしうございます」

「菅原が上つたさうだが」

誰れに聞かれたのかと思ひ、三段目と四段目をあげたと返事をする、

「では、おれが四段目を語るから、君三段目を語りたまへ  
聴手は君とおれと二人きりだ、君の都合で日をきめる。語る場所は素女の家がよからう」

杉山先生式に一切をきめてかかつて、さういふプランを立ててゐられた。その時の三段目は随分語りごたえがあつたが

けふの四段目も語りごたえがある。

も一つ、十年以前に故郷長崎へ歸省した時、かねて御無沙汰がちにくらしてゐる故郷の人に、平生の私といふものをさうらけ出してお目につけたくて、習ひおぼえた義太夫を語つて聞かせた事があつた。その時の一段を合せて、以上三度の義太夫は私の經驗から云つて一番語り榮のある義太夫だつた。語つた義太夫のよしあしではない、語る私自身の心の満足である。

習へば習ふほど奥が深いので、時々いやになりますよと誰れもいふ口上だが、そんな事を云つてゐる腹の底には「私は藝の奥底がやつと判つて來ましてね」といふ自惚が多少ともほのめいてゐるのだ、「どうだ、おれは旨えだらう」といふ天狗の一步手前にちがひない。私もそんな事が屢々あつた、けれども、兎に角義太夫をやめて十一年になつた今となつてちつくり考へて見ると、おのれの心を満足させた「語り榮」といふものは尊いことだ。

杉山先生に聞いて頂いた三段目は、念佛のナマイダの節をまちがへ、途中で語りなほしたのに對し、

「おれの前で堂々と間違ひの訂正をした態度は立派だつたぞ」

こんな事を云はれた。

父に聞いてもらつた時は、五十歳近くになつてゐた私が、さながら十二三の子供の心持にかへり、學校で御褒美をもら

つてかへつた時、お、よかつた〜と頭を撫でてくれた父の目つきに四十年ぶりに改めて再會した思ひであつた。

今、金川君が山住居の私をよろこばしてくれた氣持は、金川君といふ聞き手を前へまはしてゐるといふ氣持よりも、十一年以前、義太夫道樂に熱中してゐた純粹な童心にかへり得たうれしさだ。

何にしても、以上三度も語り榮えのよさに際會した私は仕合せものだと思ふ。かうした心持こそ、字義通りの道樂なのではあるまいか。

道樂といふ文字を、いつの頃からか、只、好い氣持になつて好きな事になづむといふ風の意味に解釋する人が多いが、この言葉の出來たはじまりは、決してさうではあるまい。道に樂しむといつてもよく、道を樂しむと云つてもよく、よきにつけあしきにつけ、あることの道に没頭して樂しむといふのが道樂であり、それに徹底することが極道といふ文字の起りとすれば、道樂も極道も味はつて面白い趣きが出る。只いたづらにものを弄ぶのでなく、じつくり噛みしめて味はふところに、もの事の趣味の奥は極められるのだと思ふ。

碁將棋の道には、へぼでも笹でも、上手下手を度外してその道に樂しむ趣味の友が得られる。釣にもさうした純真な相手がありません、義太夫道樂の仲間だつて道に樂しむ心さへ純真ならば、決して天狗根性にはならないだらう。

尤も、碁打は勝負の數がはつきり判り、釣師は釣れた魚

の數が目に見えて争ふ餘地がないので、勝負は勝負として、其の道に樂しむ心だけを殘し得るので、義太夫ばかりは皆が皆、おれの方が上手だといふ思ひ方が出來もするため、つき合ひの氣持が卑しくなるのだらう。

〔前略〕 小生の知る限りに於て竹本都太夫さん位、他人の淨瑠璃を褒める人をみた事がありません。友人素人を問はず大抵カゲでは悪口をいふものですが、都太夫さんは必ずそのいふところを見つけて素太の義太夫をお世辭なしに褒めてゐます。これはほんとに美しい事だといつても感心してをりますが、御子息さんの安藤鶴夫氏は當時都新聞紙上で鮮やかな藝評の筆を揮ひ心あるインテリ層から賞讃されてゐますが、松竹の井上専務などは先日の文樂評に對し酷く憤つてゐるのを聞いた位で、その場合大抵「藝人の伴の若僧になが解る」といふやうにいはいはれ、義太夫の事はお父さんに聞き、人形の事は門造から聞いて變かやうにいはいはれてゐるのは大變お氣の毒の事と思ひます。殊に都太夫さんとは始終藝論で争ひ差圖目義太夫の鶴八鶴次郎

といふ噂を小生など聞てもをりますので、この非難は若きよき批評家の爲にお氣の毒でなりました。先日の時報で中山泰昌とかいふ人からも「お里が知れてゐる」等といはれたのはごまをみると思ふやうな義太夫人が多いだけに小生は同情しました、殊に昨年朝日新聞の評が間違へて玉造の宿彌太郎を門造にして褒めたのをさも安藤氏のやうに書いてあるにはもう少し調べてみました。尤もあの中山といふ人は文五郎紋十郎の後援會の世話人でいはゞ切符屋さんですからあの筋の通らぬ抗議もその一事で自ら氷解しますが、都太夫さんと安藤氏の爲に一寸肩を持つた次第です

（鶴沼西海岸大木生）

——右の投書に就き至急御姓名を承りたいと思ひます。

太棹社

ラヂオ 浄曲漫評

金丸

文樂巨頭 〔八月十日〕

奥州安達原 袖萩祭文の段

豊竹 古鞆太夫  
絃 鶴澤清六

古鞆太夫の放送は、本年に入つて二月に『野崎村』を、五月に一門を引具して『先代萩』の御殿をカケ合で聴かせた以來、今夜の『安達』である。此の太夫の袖萩は、傑作と定評のある『良辨杉』に次での語り物であり、太十や寺子屋などよりも、我等は高く買つてゐるのである。サテ、スキツチを入れて、オクリから慎重に聴きこむだが、『只ださへ曇る雪空に……』の雪空がいかにも雪空らしい節調に先づ感服させられ『身に耐ゆるは血筋の縁』でふーむと唸つたほどであった。御約束の『戸を叩くにも叩かれぬ

不孝の報ひ、此垣一重がくるがねの、門より高う心から……』に至つて、吻ツと息をさせ、ヤツぱり古鞆さんのどこまでも理詰めに押してゆく語り口、と膝を進める。それから進んで、犬でもはいりましたか、の謙杖夫婦のやりとりでも、情をこめ、理をせめて、此人ならではと思はせる。愈よ待つてましたの祭文にかゝツたが、これがまた、殆んど今までの誰もが語る祭文と祭文が違ふ、といふ感に打たれた。それは飽くまで、音を沈めて決して上はついでをらぬ唄で掛りの『琴の組とは引かへて、露命をつなぐ古糸に皮も破れし三味線の……』とある本文通り、極めて哀れ深いものであつた、これに従つて、かひなでの三味弾が、こゝろとばかり、絃の音を聴かせやうとする所を、グツと沈めて、清六の撥は、どこま

でも、彼の古糸の破れ三味線を意識した弾き方に、さすが、とおもはせられたのである。元來この祭文は、京唄の「出口の柳」の曲譜を採つて、おのが今の身の上を訴へる袖萩であると聞くが、殆んど完全にそれを演出した古鞆氏に敬服する。初演に好評を博したといふ竹本大和椽は無論、今一般が語りまくる踊り地のやうな祭文ではなかつたらうとおもはれる。唯だ一ヶ所『お氣にそむきし報ひにて』の報ひにてが、どうした加減か、ひよつと、咽を廻して江戸唄めいて聴こえたのは我等が僻が耳であつたらうか。祭文にかゝる前の『罰も慮外もかへり見す、お願申し奉る』の巧さ、それから、ズツと来て『むがういふのは可愛さの、裏の濱夕幾重にも……』など、これまで誰れのを聴いても氣の付かなかつた處に膝を拍つほどの巧さを感じて驚いたと同時に、我等も餘程熱心に傾聴してゐた事に氣が付いた。これで、例の『黒澤左中』のくんだり數枚と、後の『町人の身の上なれば、若い者ぢやもの、いたづらもせい

ぢや」を棄てたのも用意周到、見返り  
／＼で時間一パイとなつて終つた。最後  
に、古靱太夫の淨瑠璃全體に就て、我等  
は常にその如何にも理詰め一方の如く、  
考へに考へを重ねた演出には感服させら  
れるが、これと同時に淨るりを楽しんで  
聴くおもしろ味が薄いことを遺憾とする  
ものである。更らに、今一言附け加へる  
が、その音づかひの妙は素よりであるが  
就中、節尻その他に、上から下々へ下げ  
る所に何人も及ぼぬ妙味がある事で、こ  
れは各種上るり若くは唄ひもので、この  
下げる音づかひの巧い人に、清元の延壽  
太夫がある他は、長唄の小三郎でも、常  
磐津の松尾太夫でも到底及ばぬ、延壽と  
古靱、此の點に於て、實に東西の二名人  
と賞讃するものである。

大阪 女 義 (八月二十日)

### 傾城阿波鳴門

順禮歌の段

竹本 綱龍  
絃 豊澤 小住

ついで此のあひだ、AKから越道さんが

この鳴門を放送したのに、又しても順禮  
歌である。AB兩當事者も、一般の聴取  
者も、そんな事はお構ひ無しかも知れぬ  
が、我等は少し馬鹿々々しくなる。プロ  
の編成に神経を使はぬ事例は當にこれば  
かりではないのである。も一つおもしろ  
いのは、越道さんの時は、四十分取つて  
あり、今夜は二十八分、同じ鳴門の半  
段で終つてゐた。越道さんがひどく悠然  
と語つてゐたのに比して、綱龍さんの、  
お弓の詞など、恐ろしいほどの早口でま  
くし立てるやうに聞こえた。が、充分に  
口を開いて、全力的に、天稟の美聲を發  
揮し、小住さんの撥に乗つて、大體に於  
ける出來は佳良であつた。捲くし立ては  
立てながらお弓が我子を説得する調子は  
可なり心持ちがよく出てゐて感服した。  
言はんとせしが待てしばし、であア泣き  
過ぎては可かぬ、泣くにはまだ早いので  
ある、嗚ぞおつるが驚いた事だらうと思  
つた。おつるの「會ひたいこつちや」は  
哀れに出來、「ま一度顔をと……」より  
「名残り惜しげに振り返り」の方が可か

つた。二度目の詠歌も「父母の……」の  
あとのお鶴の泣き聲は、お弓のと同じく  
大人になるから、一工夫あるべしだとお  
もふ。以上

文 樂 中 堅

(八月廿五日)

### 夏祭浪花鑑

釣船三婦内の段

竹本 文字太夫  
絃 豊澤 新左衛門

思へば古い文字太夫であつて、大塚以  
來、かなり本格的の修業を積んでゐる人  
であるが、どちらかといふと、文樂では  
イナ、淨曲界に於て不遇の太夫であるら  
しい。しかし、僕はこの人の義太夫は好  
きである。それも近年の事であるが、ラ  
デオでも昨年志度寺も良かったし、そ  
の前の膝栗毛のカケ合ひでも、角太夫に  
對して遜色のない喜太八を聴かせ、最近  
には、大隅、南部との阿古屋のカケ合の  
岩永の如きも、役所だけは立派に押へて  
わたとおもふ。サテ今夜の「夏祭」だが、  
これ亦た、近頃の聴き物であつた。勿論

品物も好かつたからである「賑はしき難

波高津の夏神樂、練込む振り込む荷ひ込  
む……」の語り出しと、段切りに、遠く

神樂ばやしを入れたのも、邪魔にならず  
嫌味にも墮せずして大に好かつた。釣船

の三婦が、一步を誤れば、歌舞伎になる  
所を、よく踏耐えたのも、修業鍛錬の効

であらう。女房おつきと、稍紛ららしい  
世話調子を巧みに語り分けて、主役お辰

は、上乘の出来である。疵は痛みはいた  
しませぬか、に對して「何のいな、我が

手にした事、お、恥かし……と袖おほ  
ふ」など、ちよつと心憎いばかりの味を

聽かせ、悲痛の鐵炙、その苦悶から、三  
婦や女房の吃驚、狼狽も、至極アツサリ

と、シカモ眞劍味が迸はしつてゐてよか  
つた。絃は、豫告は新造とあつたが、お

師匠さんの新左衛門が代つて弾いたらし  
い。殆んど振る處もない詞澤山の此の上

るり、此の老大家を煩はす必要もないが  
さて、爰所々のカケ聲や、締めてゆく

氣分のかはりの伴奏に、さすがとおもは  
せる撥の冴えは、我等素人にも確かに聽

取れた。

文樂 中堅 「八月廿七日」

### 近頃河原の達引

〓堀川猿廻しの段〓

竹本相生太夫

野澤喜代之助

ツレ彈 絃 野澤喜代之助

文樂座引越興行の明治座と、歌舞伎座

の新作「二人知盛」の床とをカケ持ち、

八月の相生太夫は、相應稼いだ上、千秋

樂の翌日、AKからの放送といふ大した

賣れツ子である。處が、その「堀川」は

徒らに絃の吉五郎の爲めの引立て役とい

ふ工合に、頗る不振の語り口を示して、

御最良を嘸ぞや心細がらせた事だらうほ

どの成績であつた。要するに、例の如く

語り物が間違つてゐたとより申しやうも

なく、御當人は或は一ツばし語れたつも

りか知れぬが、先づ我等の聽いた處での

悪い點だけを擧げて見ると、第一に、母

親が、全然世話になつてをらず、或は近

八の微妙の如く、太十の臍月の如く、そ

れが貧苦の上に、眼が見えず、可愛い娘

の命の瀬戸といふ哀れ氣は皆無、何とし

ても堀川の婆では無かつた。時間の都合

月は冴ゆれど、の傳兵衛の出からで、出

來さうなものと思つた「心はさうぢや無

いしやくり」などの嫌やらしさも困り

又た三味線の間が待てぬ所が隨所にあつ

たのはどうしたものか。次には、傳兵衛

が、心中に出て來た二枚目にならず、忠

六の郷右衛門ほどでもないが、立派な立

役になつてゐたのも注意が足りない。お

しゆんの「言葉にわつと泣き出し」など

の、失禮ながら拙かつた事、大落しの少

し前あたり、お素人にもモ少し巧いのが

あるやうな氣がした。それから與次郎も

イカモモ重苦しくて、かはりが全然出

來ず、「讀んだ〜」なども、今少し

何とかならんかとおもつた。吉五郎の絃

さすがに好い音も聽かせ猿廻しに鮮かな

腕を發揮した。以上、無茶苦茶にコキ下

して申譯なしだが、この以外は、御身上

だけの事は無論語つたと御承知ありたく

要するに、忙がしい中を、こんな大物に

粗瀾な稽古で、やつつけたのが悪いとい

ふ事になるのである。

五十義會の現大關及川旭氏は、誠に強靱な男性的な藝格の所有者である。男好きのする藝とは氏の如き藝質の士を謂ふのであらう。片々たる技巧を弄さず、カツチリと淨瑠璃と四つにくんで、グン／＼ひた押しにモリ上げて行く重厚堅實な語り口は、巨膽な力相撲を見る時に似て線の太い熱調的な快組感がある。

蒸し暑い眞夏のある夜、下谷の松尾俱樂部で氏の傑作「逆櫓」を聴いた時私は唸つた。

何と云ふ嫌味のない、サツパリとした、それでめて深いコクのある藝質であらう……と、心秘かに氏の熱伎に敬慕した。就中權四郎の巧さは技魂渾一した力強い迫真性がある。

栗原千鶴氏のやうに、淨瑠璃を底深くエグつて堪能させる凄絶な良さは別な眞摯な氣魄と、逞ましい壓力が迸るやうにモリ上つて来る、熱魂的な藝調が異彩を放つ。

氏の淨瑠璃は繊細な技巧の驅使や、柔軟性に富んだ潤美さには淡い色調も生本で地味であるにも拘らず、測々として心に迫り胸を揺

ぶる要因は、嚴肅な眞陰さと淨瑠璃を語る腹がどつしりと据つてゐる爲だと思ふ。

研鑽練磨究々として倦まず撻ゆまず、目的の彼岸に突進する膽目もふらぬ精進努力は、全身全魂を其の語り物に打ち込んで、その淨瑠璃の本質的精神を的確に擷んで鮮描する。氏の淨瑠璃に小手先の技巧や、なめらかな

ンもない男性的な深鏘な迫力を持つ、力の淨瑠璃も立派な一存在だ。只全身的に語る時、その迫力が息苦しい迄に聴客に壓力を與へてどこか軽い所で體をかはして、次のモリ上りに据へる爲めに力を「ためて」零圍氣を醸成するネトリがない時のあるのが惜しい。

## 素義人描影

及川 旭氏——胸打つ氣魄

内田 富太郎

氏は技巧の世界に織巧さを磨く人でなく、堂々たる風格と藝魂の威大さで、飽迄も男性的に熱演する處に面目が躍動する。

關取二代鑑の秋津島切腹など、全體の色調と作魂が氏に打つて付けて惚れ／＼するやうな線の太さと強靱な迫力が樂しませる。

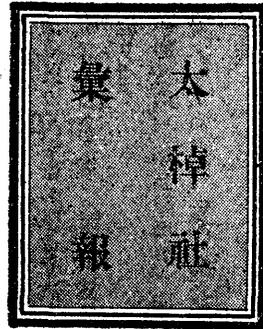
器用さを求めるものは失望しよう、しかし、凱々たる氣魄と作の眞魂に觸れることを欲するものは、その眞摯な力演によつて満足を與へられよう。

私は氏に依つて夏祭浪花鑑の八つ目「石割雪駄の合印團七内」を語られたらと想つてゐる。

斯道には理智的で心理的な淨瑠璃もあり、抒情的で情緒的な淨瑠璃もあるけれど、氏のやうに氣魄的な實力主義で、いささかのケレ

☆☆

☆☆



▽本欄は通信又は番組御送付のもの、或は新生の會を報道するものであります。

▽開催前月に詳細を報道したものは開催後の記事を略します。

▽特種の催はしの外前置きを略します。

— 記者 —

## 文樂座素淨瑠璃東上

九月廿一日より一週間、新橋演舞場に三時半開演にて、出し物毎日替りて久々素淨瑠璃一座が東上する事となつた。

出演者は津太夫(寛治郎) 古鞆太夫(清六) 文字太夫(喜代之助) 相生太夫(吉五郎) 南部太夫(重造)その他。

## 鶴澤清一還暦記念大會

九月十三日正午日本橋俱樂部に於て左記の番組に依り盛大に舉行された。

前(喜照、佳照) 重の井(松雨、猿玉) 張殿(みさを、佳照) 太十(美鳳、猿玉) 宿屋三番叟(佳照、若好、素昇、佳仙、佳(愛水、佳照) 酒屋(鏡鳳、猿玉) 寺子屋前代子、清一、猿玉、紋教、清二、清三) (大熊、清一) 奥(勝駒、越駒) 山名屋(悟紙治(六花、清一) 新口(美春、清一) 太十堂、佳照) 合邦(林昇、若好) 松王屋敷(松

## 五聲會

松岡茂里雄、鈴木松寶氏並に今回新たに川口子太郎、木村一司の兩氏が客員として加入した五聲會は、九月十九日日本橋俱樂部に於て秋季演奏會を催はす事になつたが、河野國聲氏も十月より同會の客員として加はり、和田金屬氏も病氣

瀧、紋教) 宿屋霞、清一(合邦(奇聲、猿玉) 鎌三(痴樂、若好) 草履打(喜鳳、道之助) 太十掛合(乃菊、柳光、一昇、光玉、枝蝶、佳照) 新口村(紫蝶、仙玉) 十種香(都竹、都太夫) 堀川(可昇、素昇) 壺坂奥(北壽、若好) 太十(正鳳、道之助) 沼津(都山、都太夫) 太十奥(美福、素昇) 政右衛門邸(旭、道之助) 沼津(桔梗、素昇) 帶屋(都川、清二) 太十(社本、佳繁) 辨上(榮笑、猿玉) 佐太村(清、道之助) 壺坂奥(操、道之助、越道) 油屋(和舟、清一) 羽のかむろ(立方、光川治子、佳照、佳若、佳仙、佳代子、清一、猿玉、若好、清二、清三)

全快同月より出演する事になつてゐる。  
當日の番組は左の通り。

中將姫(一司、蟻鳳) 川連館(子太郎、和孝) 揚屋(松樂、染登) 餅屋(三芳、猿三郎) 合邦(茂里雄、猿平) 酒屋馨鳳(猿之助、琴、松四郎)

## 義太夫 古曲發表會

深川區清澄町豊澤芳太郎師方に事務所を置き、研究鍊磨に精進してゐる「義太夫古曲發表會」は、十月十一日午後六時より並木俱樂部に於て秋季演奏會を催はし、十二日御會式に因みて日蓮記御法海を波木井の里子賣の段より池上本門寺の段まで上演する事に決定、其他左記番組の通り。

伊勢音頭踊(小品淨瑠璃) 卯太夫、巴太夫、松市郎、宗之助、絃内、扇之助、松四郎、美之助。

日蓮記御法海 波木井の里子賣の段

(駒登太夫、松四郎) 勘作住家の段(卯太夫、宗之助) 經木流しの段(朝見太夫、扇之助) 池上本門寺の段(巴太夫、猿喜知)

日親記 道行藤浪物狂ひの段(日親聖人、朝見太夫、藤浪姫、巴太夫、岩橋の局、駒登太夫、茶道珍才、卯太夫) 三味線(芳太郎) ツレ(猿喜知、絃内、松四郎、宗之助、扇之助、美之助、松市郎、團七)

## 淨瑠璃研究座談會

八月廿五日日比谷蠶絲會館七階に於て

第四回を開催。出席者は内田富太郎、中川愛氷、岸竹史、田中煙亭、棚端源太郎、豊竹巖太夫、豊澤廣助、杉本英、森三好、中野吳羽、井上和風、中山太郎、菅田英久、高橋十三三、石井規外、川口子太郎、緒方千晴、大樂葵、橋本三司、飛石かなめ、木口右平次、高橋東好、濱田新昇、井上素鳳、服部伸、木村一司、安藤鶴夫、星野桔梗、長野瀨晚花、佐々木俊次郎、上田龜吉、宮坂小米、鶴澤清一、竹本住若、豊澤猿幸、岡田蝶花形、外大津山榮

子、伊藤芳野の三婦人。なほ第五回は九月廿一日正午より三信ビル東洋軒にて明治時代女義招待會として開催。

## 竹本綱廣師

## 歡迎義太夫會

名古屋にて斯道の一人者竹本綱廣師の東上を歡迎し、和光會主催にて八月廿一日午後六時より文化俱樂部に於て左の番組に依り賑々しく一夕の義太夫會を催はした。

十種香(初子、小和光) 太十(勝藤、小和光) 壺坂(綱照、綱廣) 玉三(吳洲、小和光) 陣屋(綱廣、絃平)

## 三好會

同會の九月は竹本綾清と合併、九月廿二日駒形俱樂部に於て左記番組のもとに開催。

柳(繁好、三好) 酒屋(綾男、綾清) 日吉(喜三香、三好) 寺子屋(斌、綾清) 太十(日好、三好) 野崎(美蝶、綾清、ツレ三好)

## 因會主催素義の會

九月十八日日本橋俱樂部に於て開催される筈の同會は、北白川宮御喪儀の爲謹んで音曲停止のため中止となつた。

## 素 淨曲研究會

同會の第廿五回は九月廿五日夜第一徵兵保儉講堂に開催。

辨上(福登久) 壺坂(有樂) 合邦(竹史) 長局(染登)

## 旭 勝 會

大連に於ける旭勝會は八月廿四、廿五の兩日午後六時より常盤町社會館にて淨瑠璃大會を開催、番組左の通り。

初日 忠六(郷右工門、泉、彌五郎、万華、母、翠香、勘平、あさひ) 太十(華玉) 日吉(義昇) 沼津(柳甫) 喜内(瑞松) 合邦(喜樂) 比翼塚(翠香)

二日目 先代(禮子) 陣屋(義昇) 戀十(旭登) 合邦(三升) 志渡寺(万華) 陣屋(泉)

堀川(あさひ) 絃(旭勝、旭晴)

## 大阪・名古屋

## 素人淨瑠璃大會

過般高山市にて千年會、因會、倭會の後援にて盛會な淨瑠璃會を開催した。名古屋長尾仙昇氏は文樂座暑中休暇の鶴澤寛次郎師を招き八月廿二、廿三の兩日再び同市公會堂に於て大阪、名古屋合同にて淨瑠璃大會を開催頗る盛況を呈した。

初日 合邦(大阪巴洋) 柳(尼ヶ崎琴城) 逆櫓(名古屋仙昇)

二日目 沼津(仙昇) 太十(琴城) 陣屋(巴洋) 絃(寛治郎)

## 文樂座の大陸行き

八月一日より東上明治座にて滿員の盛況裡に廿五日打あげ後、豊竹呂太夫、竹本伊達太夫、竹本文太夫、竹本雛太夫。三味線吉左、友衛門、吉季、勝芳。人形文五郎、紋十郎、玉幸、政龜、玉市其他の一座にて同夜東京驛出發、京城、安東

奉天、新京、平城、ハルビン、吉林、鞍山、撫順、大連、釜山等巡演の途に着いた。

## 第七回

## 淨 雲 會

九月廿六、廿七日の二日間毎夕六時開演にて、下谷交正俱樂部に開催、八月を休會した同會は秋のシーズンの先頭を承つて華々しく全同人出演にて開催と決定 初日 太十(掛合) 都昇、子太郎、高尾、其角、中次、一司。

二日目 光玉、文盛、柳光、都竹、美津豆、晋水。

大體左記の通りだが、語物は未定である。

## 帝都素義聯合會

十月十四、五、六日の三日間淺草雷門並木俱樂部に於て正午開演、語り順全部抽籤で廿七分間、會費十圓、申込切は九月三十日、本郷區元町二ノ九井上泉方同會にて受附け中。

後本誌名譽會員

(イロハ順)

緒保安安小吉安中佐北菅菅橋阿櫻吉宮鈴木廣  
 方々藤藤川田藤澤藤島田原本部井川原木村瀬  
 千長都都都登く之北梅葉梅呂浪與一一ろ  
 晴平昇竹山盛ろ巴助斗笑光月一光補子信司は  
 氏氏氏氏氏氏氏氏氏氏氏氏氏氏氏氏氏氏氏氏

大高黒西高加飛鈴青林小鈴木本林岡神松岸久栗  
 用山川田橋石木山林木木本馬本米原  
 大藤か  
 嘉和可可な和和和和和大林柳里千竹中千  
 津子叶松遊兜め勇狂勢舟樂熊昇光芳鳥史次鶴  
 氏氏氏氏氏氏氏氏氏氏氏氏氏氏氏氏氏氏氏氏

長松福岡國山本石中乃萩宮小川新坂杉野根小井疋田小  
 谷林中田井下城川野村原本焚口川倉山田本林上田口森  
 川  
 文福又彌や彌冠華吳乃つ武と太月素高團二大辰叶  
 久笑絲聲と生之笑羽菊ぼ藏ろ郎美遊橋尾壽八巽龍壽昇  
 氏氏氏氏氏氏氏氏氏氏氏氏氏氏氏氏氏氏氏氏氏氏氏

齋木寺奥藤中柳及大堂寶岡山保湯田松河原水安鈴上川  
 藤村岡村牧川川築野藏崎崎谷淺中岡野田戸藤木杉田  
 さ  
 山か三三淡愛有鐵天向紅光湖語國越光兒文三  
 生之幸玉路氷明旭葵幹昇六陽司玉月松聲巴壽樂雀盛樂  
 氏氏氏氏氏氏氏氏氏氏氏氏氏氏氏氏氏氏氏氏氏氏氏

岩保三山吉岩澤三增增乾橋平歸岡前日星淺錦金細藤橋平  
 田坂並田良木部浦田田 本井山木島野野田 田 田本 井  
 末有義義蟻義其鏡喜喜 桔 掬軌世一貴金桔奇 錦 金 三三  
 成曲昌昇若雀角鳳香城梗月外花郎昇泉梗聲松鳳清壽司榮  
 氏氏氏氏氏氏氏氏氏氏氏氏氏氏氏氏氏氏氏氏氏氏氏氏氏氏氏氏

高武打濱倉田山平花菊勝小鈴須村高吉池北野橫吉高  
 品笠矢口田口田井房池田原木田上橋田田村口井田瀬  
 一宏晋秋司司壽壽紫秋松松松美津宮三三三 な三 地  
 重亮水華樂重瓢樂蝶月雨樂寶義豆古芳國葵と由句操  
 氏氏氏氏氏氏氏氏氏氏氏氏氏氏氏氏氏氏氏氏氏氏氏氏氏氏氏氏

船橋 大垣 神戸 大阪 同 同 同 同 米國 (地方之部) 仁 關 時 沼 富 塚 近 白 松 魚 池 桑 平  
 川 吉岡 岡 氏 西 兼 杉 武 平 野 木 口 田 井 岡 口 江 井 岡 茂 里 美 美 美 平  
 奈部 十八 源 鶴 西 廣 陶 榮 一 翠 靜 靜 盛 生 清 清 清 里 雄 福 尙 峰 茶  
 銀司 公 氏

新名譽會員

下關 保良 鈴鳳氏  
 橫濱 和田 和朝氏  
 同 霜島 錦司氏  
 同 鈴木 香雀氏  
 同 田中 吞笑氏  
 同 松木 吞笑氏  
 平塚市 國森 鳴門氏  
 八幡 古賀 大彌氏  
 安東市 岩崎 山彦氏

福中 又絲氏

岡本貴一郎氏

本誌後援名譽會員之御快諾  
 賜り難有奉深謝候

太 棹 社

# 浄界消息

なつた。

▼因會女子部 八月は休演をした同會は九月廿八日午後一時より第七回を並木俱樂部に開催。

▼森三好氏より 其後三好會は七、八兩月水金毎日午後六時半より研究所にて鍛鍊し、八月十四日は東上の文樂座を拜聽旁々研究せり。

▼南北座 出征將士遺家族慰安の淨瑠璃大會を南北座人形人にて大日本淨曲協會主催にて八月三、四の兩日午後一時より鎌倉第一小學校講堂に於て開催、西村游史、船大工樽、水野昇、由坂玉鳳、緒方千晴、松林福笑、三芳有樂、青島千曲高瀬操、齋藤山生、黒川叶、廣瀬いろはの諸氏が出演。

▼豊澤猿藏氏 門弟の鶴澤民壽師が秋田で病んで入院をしたので、内地へ赴いた豊澤猿藏氏は歸京間もなく死去の報に接し、再び同地へ赴き懇切に葬送の役目を果たして師弟の仁義を全うした。

▼山田壽瓢氏より 八月十九日綾秀

會を東海道線辨天島山田別荘にて開催。鈴ヶ森(駒子)酒屋(松若)本下(龜鶴)寺子屋(壽瓢)絃(綾秀)にて東西避暑客の來聽にて盛會を極む。辨天島即吟「老松相映水連空。點々漁村細徑通。帆影如鷗何處去。我民一幅畫樓中」

▼共精會秋季大會 八幡市共精會秋季大會は十月十日より五日間中津市蓬萊館に於て伊藤柳平、三木金星兩氏審査のもとに第八回を開催。なほ同會々長古賀大彌氏は八月廿日商用にて上京。

▼増田當百三周忌 九月十三日正午より淺草雷門並木俱樂部に、主催故人の父増田力彌氏に依つて追善義太夫大會を開催、誌經、初手向壺坂(年梅南米)追手向沼津(氷井永樂)をはじめとして都太夫、駒登太夫、辰六、絃平、糸造、新造、和壽、素女、重之助、佳照和光、雷糸、團蝶、清調、扇之助らの連中がそれら得意の語物を選んで、故人に追善の心を籠めた演奏を行ひ、大人滿員の盛況で、近頃立派な追善義太夫會として盛會であつた。

▼松本行 星野桔梗、和田春和、木下

松玉、清水二樂、黒川叶の諸氏は八月十一、十二の兩日松本に遠征し、向市松本座に於て義太夫會を開催、近來稀な大盛況を呈した。初日……十種香(松玉、東吉)沼津(二樂、綱助)野崎(叶、絃平)帶屋(春和、絃平)寺子屋(桔梗、綱助)二日目……松玉邸(二樂、綱助)太十(松玉、東吉)聚樂町(叶、絃平)合邦(春和、絃平)堀川(桔梗、絃平、綱助)

▼星野桔梗氏より 小生等一行去る十日當地着、松玉氏經營の井筒の湯に投宿、十一、十二の兩日松本市松本座に於て二樂、松玉、叶、春和、桔梗、三味線絃平、綱助にて二日間大入大盛況を極めました。(松本にて)

▼中老會 中老會は九月十二日並木俱樂部にて開催、忠臣藏三段目より七段目まで外に六七の間にミドリをつける事に

# 當座帳

▽高瀬操氏 品川區大井鹿島町三九四番地へ轉居。電話高輪四七九一番。  
 ▽齋藤山生氏 八月廿六日出立卅三番觀音參詣、九月六日歸京。

## 訃報

鶴澤民壽師 六月三十日より秋田湯澤町へ出張稽古中の同師は七月五日發病、同地中央病院に入院中の處、八月十六日午後七時四十分遂に逝去、享年六十九。謹んで哀悼の意を表す。

## 編輯後記

×……愈々秋のシーズンとなりました。多くの會が華々しく開催され、奉祝皇紀二千六百年の義太夫會を一層多彩に飾る事と思ひます。  
 ×……「太棹」はお蔭を以て毎號御評判を載き健全明朗な義太夫趣味普及に突進致

してをります。本社この意をお級み取り下さいまして一層の御鞭達をお願い申し上げます。

×……扱て新秋九月號は先づ完頭に文學博士伊原青々園先生の興味深い研究の玉稿を頂戴致しました事を御禮申し上げます。續いて久方振りに平山蘆江氏からの隨筆もまことに面白く、齋藤拳三氏の文學座總評はよき記録として太棹社の誇りと致すところです。

×……先年迄は安藤鶴夫氏が「太棹」誌上で文學座東上の都度正しき藝評を書かれてをりましたが、今日安藤氏も都新聞に於て堂々藝評の陣を張つてをられるをみるにつけても當社の藝評が斯界に多くの示唆を送るものとして編輯者の喜びを感じる次第です。

×……よりよき名鑑を佛る爲に遅延致しました本社の「素義名鑑」も愈々別掲の如く十月に締切 早速發行の準備に移ります。

何卒御期待の程御願申上げます。

太棹社

定		價		廣告		料	
部	金	分	金	通	別	一	頁
一	三	一	三	一	一	一	一
部	十	年	三	一	一	一	一
金	錢	分	圓	頁	頁	頁	頁
三	錢	金	圓	金	金	金	金
十	錢	一	圓	貳	拾	拾	圓
錢	錢	分	三	圓	圓	圓	圓
郵	稅	共	共	共	共	共	共
三	錢						
錢	共						

▼記念寫眞掲載料は一頁金拾五圓申受ます  
 ▼誌代は總て前金御拂込の事  
 ▼なる可く振替に御送金の事  
 ▼郵券代用は一割増但三錢切手  
 の事

昭和十五年九月八日印刷納本  
 昭和十五年九月十日發行  
 東京市小石川區音羽二丁目四  
 編輯兼 發行入 富 取 壽 鹿  
 東京市牛込區早稻田町五八  
 印刷人 栗 原 榮 松  
 東京市牛込區早稻田町五八  
 印刷所 栗 原 印 刷 所  
 電話年込一四五一番

東京市小石川區音羽二丁目四  
 發行所 太 棹 社  
 振替東京三一七八五番

(行發日十回一月毎)

# 帝都素義名鑑いよく締切

帝都素義名鑑の儀、いよく十月十日を以てメ切ります。毎々謹告の  
通りの事情にて大變延刊を致しまして恐縮に堪えません。メ切後は直ち  
に編輯に取りかゝつて年内中に出版致します。

まだ御寫眞御撮影なき皆様は何卒お急ぎを願上ます。

太  
棹  
社